

都市公園における利用率向上に関する基礎的研究 —山口県宇部市常盤公園を事例として—

内田文雄 (理工学研究科) 村上亮 (感性デザイン工学専攻)

Fundamental study on improving utility of city parks —Tokiwa park in the Yamaguchi Ube City as a case—

Fumio UCHIDA (Professor of graduate school of Science and Engineering)

Ryo MURAKAMI (Graduate Student, Graduate School of Science and Engineering)

This study aims to expand the role of the park and the range of use and to promote the use. Additionally, the diversification and complication are advanced through the resident requests from the park. It has aimed at obtaining of the method for finding a concrete activation strategy. The Tokiwa park covers as a case study, and it explores the direction of the management for the activation of the Tokiwa park in the future.

Through interviews and field work, I was able to understand the attraction of Tokiwa Park and the opinion of the users. Both of the finding obtained by two investigations are analyzed, and a concrete activation strategy of the Tokiwa park is examined.

Key Words: city park, availability, activation, use realities, fieldwork, hearing

1.はじめに

近年都市公園では、公園緑地制度の改定を踏まえ、公園の役割と活用の範囲を拡大して利用を促進することが図られつつある*1。公園行政は「公園は地域特性に応じて広く多面的に利用されてこそその存在価値を増す」といった、「管理」から「利用」へと流れを変え、加えて住民が公園に求めるものの多様化・複雑化が進んでいる。

今後、公園の運営の方針を考えるにあたって「多様化するニーズへの対策」という曖昧な一般解ではなく、ソフト・ハードの両面で「本当に求められているものは何であるのか」について明確にする必要がある。しかしこのような背景の中で、実際に利用促進のための具体的な方策が見出せない都市公園も存在する。宇部市の「常盤公園」もその一例である。近年常盤公園の利用者数は減少傾向にあり、利用率の向上が求められているが、公園を管理する側が、「常盤

公園が持っている魅力は何であるのか」「常盤公園が利用者にとってどのような存在であるのか」などを把握できていないために、その取り組みの方向性を掴めずにいる。

本研究は、利用促進・利用率向上のための方策が見出せず、具体的な対策に取り掛かれずにいる都市公園が、具体的な活性化方策を見出すための方法についての一見解を得ることを目的としている。

そのために、活性化策の見解を得るための取り組みの一例として、常盤公園をケーススタディとし、常盤公園の活性化に向けた今後の運営の方向性を探り、また、利用率の向上のための具体的な取り組みを探る。研究の方法としては、活性化方策を見出した都市公園の事例について共通点を探ることにより都市公園の活性化方策を探る上での見解を得て、常盤公園の現在までの取り組みを把握した上でフィールドワーク調査・ヒアリング調査を行い、常盤公園の現

状・利用者のニーズの把握を行う。この二つの調査により得られた知見の双方を分析し、常盤公園の具体的な活性化方策の検討を行う。

2. 実態調査

2-1. フィールドワーク調査

フィールドワーク調査は、常盤公園の公園設備・施設の管理運営状態を明らかにするために、これら情報を基に、常盤公園の空間と整備の現状と課題点を探った。また、その情報を地図上にプロットし、ベースマップを作成した。調査内容としては、各施設の運営の状況、ベンチ・東屋・トイレ等の設備の配置、公園内遊歩道の状況、空き地・広場等余空間の状況である。

■ 常盤公園北部

周遊路沿いには一定間隔で休憩所が設けられ、ゆっくり散策するための配慮はなされているが、中にはゴミが散乱するなどメンテナンスが行き届いていないものもある。また、トイレの数が不足しており整備が必要である。また、当初計画にあったバードウォッチングをするための袋小路などは設置されているものかなり荒れている状態で、その存在を知る人も少ない。北部にはトイレ以外の新しい施設の設置は利用率の面からも必要ないと考えられるが、メンテナンスを徹底することで新たな魅力を発揮すると考えられる。

■ 常盤公園南部

北部に比べ動線計画が多様に為されているが、一方で利用者が寄り付かない場所も目立つ。また休憩所については東屋型の休憩所をはじめ、ベンチなども全く利用されていないと思われるほど荒れているものも確認された。極端に目立つ場所に設置されほとんど利用されていないものもある。また北部同様、南部でも施設やトイレなどの場所を示したサインが少ない。施設については、利用者が少なく展示も更新されないものが多い。

2-2. ヒアリング調査

ヒアリング調査結果、常盤公園内にて利用者

	北部	南部	計
施設	4箇所	10箇所	14箇所
駐車場	3箇所	6箇所	9箇所
トイレ	1箇所	6箇所	7箇所
ベンチ	36脚	98脚	134脚
自動販売機	5台	21台	26台
ゴミ箱	1箇所	10箇所	11点
彫刻	15点	104点	119点

に対しヒアリング調査を行った。

このヒアリング調査は、常盤公園の利用のされ方の実態と、利用者の常盤公園に対するニーズを明らかにすることを目的としている。ヒアリング調査での質問事項は 19 項目で、利用者 80 組に対して行った。把握する事項として、利用者の年齢性別などの基本情報と、居住地、交通手段、利用頻度、利用目的、魅力を感じる施設、魅力を感じる要素、不満な点、ほしい場所、利用者の動線・滞留、求める将来像について質問した。

同時に、地元紙である宇部日報が行った宇部市民と宇部市近郊の住民を対象にしたアンケート調査の結果を参考にした。

■ 利用者の居住範囲・交通手段

現在常盤公園の利用者の居住地は 86% が宇部市内であり、来園する際に用いられている交通手段としては「自動車」が 61% と最も多いが、徒歩も 33% と、徒歩圏からの

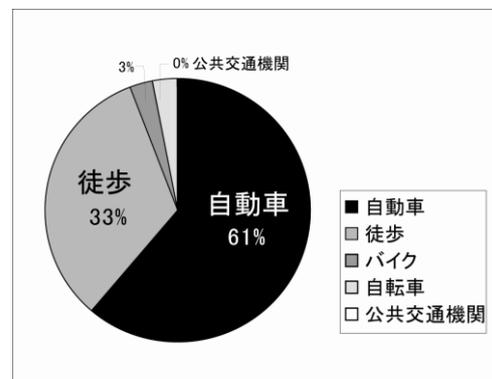


図-2 利用者の交通手段

利用者が全体の 3 割を占めることが明らかとなった。一方で、公共交通機関を利用して来園する利用者は 0% であった。

■ 利用頻度

利用頻度では、公園利用者を対象としたヒアリング調査では 59% が週 1 回以上利用しているのに対し、宇部市民・宇部市近郊の住民を対象にしたアンケート調査では週 1 回以上利用するのは 3% に過ぎなかった。このことよりごく限られた市民が常盤公園のリピーターとなり、高い頻度で利用していること、また、約半数が宇部市近郊に住みながら常盤公園を利用していないことが明らかとなった。

■利用目的・魅力を感じる施設

利用者の利用目的は「散歩」・「運動」が計84%と大多数を占めるのに対し、施設利用を目的に来園したのはわずか3%であった。また、魅力を感じる施設に対しては「ない」と回答した利用者が最も多かった。

■常盤公園の魅力

利用者に対して常盤公園の魅力ヒアリングした結果は、「自然が多い」が36%、「動物と触れ合える」が15%、「常盤湖」が11%となり、これらの3つの要素が全体の60%となった。一方で、「多様なイベント」が魅力であると回答したのはわずか1%であった。例年よりも多く企画されたイベントが、利用者に認知されていないことが大きな原因と考えられ、PRが不足していることが明らかとなった。

■常盤公園に対する不満・ほしい場所

利用者が抱く常盤公園への不満として多く聞かれたのは「ゆっくり休憩できる場所が少ない」という意見であり、同様に「ほしい場所は」との質問には「ゆっくり休憩できる場所」が最も多い34%となった。フィールドワーク調査により公園南部においては休憩所が多く設置されていることが明らかとなったが、それがうまく機能していないことがこのヒアリングの結果に繋がったと考える。

■利用者の動線

図-6の白線は利用者の動線を示したものである。利用者の公園内での動線は、公園南部の白鳥大橋～しょうぶ苑・西駐車場～噴水広場～東駐車場にかけて集中していることが明らかとなった。一方、彫刻が展示されている部分の動線が少なく、「公園の利用目的」の結果でも明らかとなったように、利用者の彫刻に対する関心が薄いことがここにも表れている。

■利用者の滞留

図-6の赤い点で示したポイントが利用者の滞留が確認できた場所である。利用者の公園内での滞留場所は、白鳥大橋北端の東屋、しょうぶ苑、藤棚、噴水池、白鳥湖周辺に多く見られ、特に白鳥湖周辺に集中していることが明らかとなった。一方ほとんど利用されることのない休憩所の存在が確認された。

図-3 来園者聞いた利用頻度

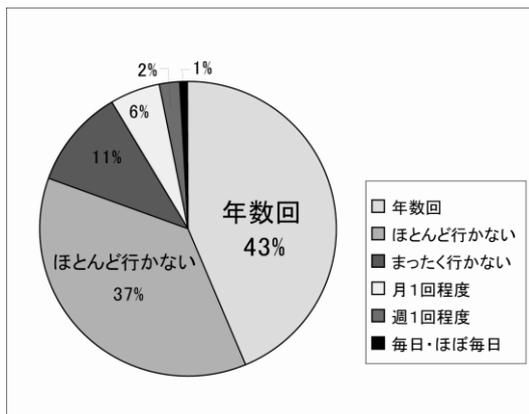


図-4 市民・近隣市民の利用頻度¹⁾

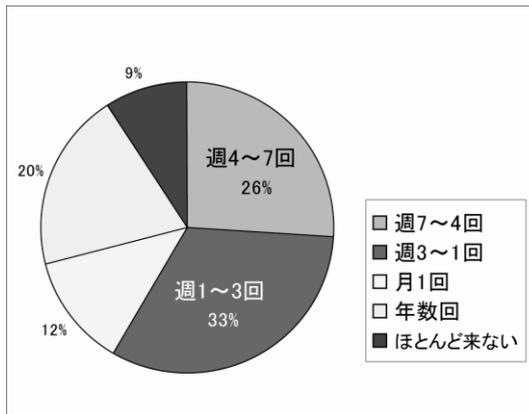


図-5 利用目的

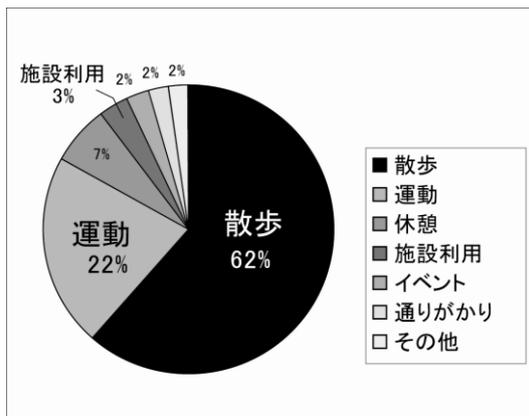
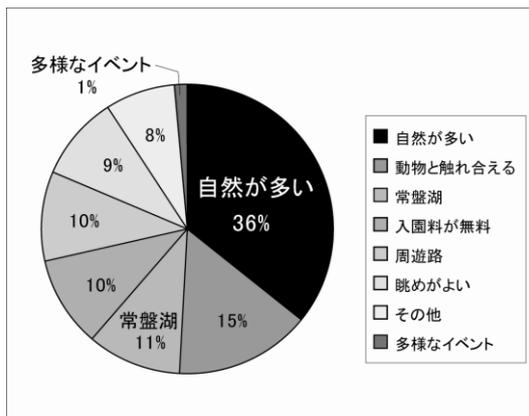


図-6 常盤公園の魅力



■求められる将来像

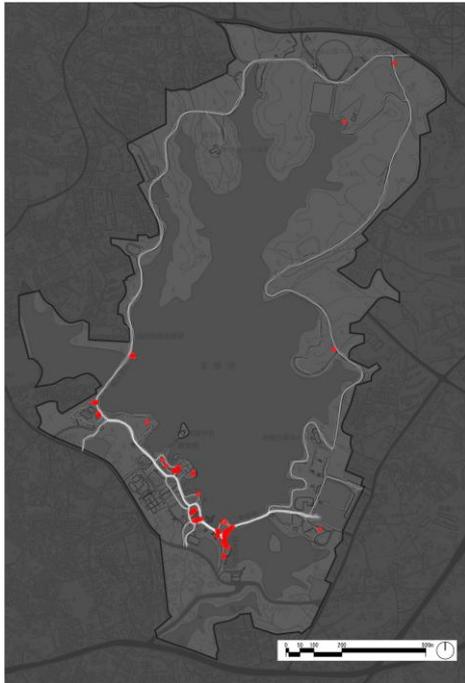


図7 利用者の動線・滞留場所

常盤公園の将来像として、「自然公園化」を利用者の73%、市民・近隣市民の58%が望んでいることが明らかとなった。常盤公園の自然の要素が高く評価されていることがここでも明らかとなった。一方「現状のままでよい」と回答したのはそれぞれ5%・12%であり、常盤公園に変化が求められていることも明らかとなった。

3.活性化策の検討

図-8はフィールドワーク調査とヒアリング調査の二つの調査より見えてきた常盤公園の魅力、特徴、課題の一覧である。二つの調査によりこれまで常盤公園が見出すことのできなかつた公園の個性を明確にした。この結果より、常盤公園における今後の運営の方向性としては、利用者からの支持の多かった「自然公園」だけではなく、他公園との差別化を図るためにも、常盤公園が持つ魅力・特徴である「施設・動植物・彫

図-8 常盤公園の魅力・特徴・課題

魅力	① 常盤湖をはじめとした豊かな自然 ② 白鳥湖周辺に放たれた動物の存在
特徴	① 県下最大の面積と多様な施設の存在 ② 来園に用いることができる交通手段が多様 ③ 彫刻の存在
課題	① 公共交通機関とのアクセスの改善 ② 施設の有料化と利用率の向上 ③ 休憩所の配置計画の改善 ④ 彫刻の活用 ⑤ 設備のメンテナンスの徹底 ⑥ PR・周知徹底への取り組み

刻」の3つの要素に、これらに共通するニーズである「情報」へ対応するための「知る」要素で連携させた公園運営が有効であると考えられる。また今後は常盤公園の魅力を確認に表し、市内をはじめ県外に向けても情報を発信し、自然公園として観光資源化することが必要である。

また、調査により抽出した6つの課題に対して段階的に取り組む必要があり、この取り組みが常盤公園の活性化につながると考える。

4.まとめ

常盤公園の活性化方策を導く上で得られた、都市公園が活性化方策を見出す方法の見解は、図-9の5段階の取り組みである。

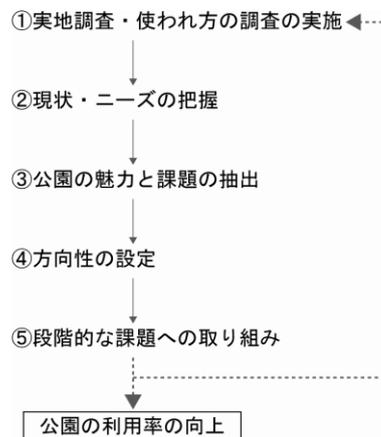


図-9 都市公園の活性化のための取り組みのサイクル

はじめの3段階で公園の存在とイメージを明確にし、4段階目で常盤公園の活性化策の見解を得た。

近年都市公園に対するニーズの多様化と複雑化が進んでおり、変化し続けるニーズの把握はその公園が存続する限り必要不可欠である。公園管理者が継続的に図-8の5段階の取り組みを意識した運営をし続けることによって、公園の明確な方向性を見失うことなく運営することが可能であり、公園の利用率の低下を防ぐと同時に更なる活性化を望むことができると考える。

本論文の見解を常盤公園にて実践し、その結果を活用して、新たな知見を得ることが今後の課題である。

*1 伊藤章雄著：今公園で何が起きているか、2002年株式会社ぎょうせい p38

1) 宇部日報：輝け古里の常盤公園、2008年、宇部日報、10/28号第一面